

Title	乳幼児における言語レジスターの獲得(Abstract_要旨)
Author(s)	池田, 彩夏
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2018-07-23
URL	https://doi.org/10.14989/doctor.k21285
Right	学位規則第9条第2項により要約公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

京都大学	博士（文学）	氏名	池田 彩夏
論文題目	乳幼児における言語レジスターの獲得		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>他者との円滑なコミュニケーションを実現するためには、自分が置かれた社会的状況に応じて様々に振る舞いを調整することが必須である。特に言語的コミュニケーションにおいては、使用言語の文法ルールに則った「正しい」言語情報の生成だけでなく、情報が伝えられる状況に「ふさわしい」方法での伝達が求められる。このような相手や状況によって変化する言語形式は「言語レジスター」と呼ばれ、使用する語彙や発話速度など、多岐にわたる調整が行われる。先行研究より、聞き手に応じた話し方をするという言語レジスターの「ルールの理解」は、3歳以降で可能であることが報告されている。一方、言語レジスターの適切で一貫した運用が可能になるまでには時間がかかり、6歳以降でみられることが報告されている。しかし、その発達プロセスの全容は明らかではなく、検討すべき課題が残っている。本論文では、年少児における言語レジスターのルールの理解を検討するとともに（第2章）、その学習メカニズムの解明のため、言語レジスターの学習源である養育者の発話の包括的な記述を試みた（第3章）。また、幼児及び成人を対象に、言語レジスター使用の社会的意味（例えば、目上の人に向かって友達口調で話すなどの不適切な言語レジスターの使用が人間関係に影響を与えること）の理解についての検討を行った（第4章）。さらに、養育者による対乳幼児発話の分析から、レジスターの使用動機を探ることを試みた（第5章）。</p> <p>第2章では、他者との言語を介したコミュニケーションが劇的に増加する時期の20ヶ月児を対象に、4つの実験を行った。実験1では、対乳幼児発話と対成人発話が特定の聞き手（乳幼児または大人）と結びつくことを理解しているかを、期待違反法を用いて検討した。その結果、20ヶ月児は対乳幼児発話で話しかけられるのは乳児であると予測していたが、対成人発話で話しかけられるのは大人だとはみなしていなかった。これらは、生後20ヶ月の時点ですでに、部分的には言語レジスターと聞き手の組み合わせを理解していることを示唆する。実験2・4では、言語レジスターのより一般化されたルールとして、言語レジスターが聞き手によって変化する話し方であることを理解しているのかを、馴化スイッチ法を用いて検討した。参加児は2種類の映像刺激への馴化後、4種類のテスト刺激を提示された。馴化刺激は、「大人が対乳幼児発話で乳児に話しかける映像」と「大人が対成人発話で大人に話しかける映像」であった。テスト刺激のうち、最初の1つは、馴化刺激のうちの1つと同様の映像（ベースライン）であった。残りの3つの刺激は、ベースラインと比べると、レジスター、聞き手、話し手がベースラインで使用されなかった馴化刺激と入れ替わっていた。つまり、言語レジスターのルールを理解しているならば、レジスター変化条件と聞き手変化条件ではベースラインよりも注視時間が伸びるが、話し手変化条件では注視時間は伸びないと予測できる。実験の結果、予測通りの注視パターンが得られた。統制実験（実験3）の結果、実験2で見られた注視パターンが、馴化時の学習の結果である可能性は排除された。さらに、実験4の実施により、実験2・3で用いた実験パラダイムの妥当性が確認された。従って、生後20ヶ月ですでに、言語レジスターの一般化された抽象的ルールを理解できていることが示唆された。</p> <p>第3章では、乳幼児の言語レジスター獲得メカニズムを検討するための基礎データの構</p>			

策を目的とし、1-3歳の発達段階の異なる子を持つ60名の養育者による対乳幼児発話と対成人発話を取得し、その変化を包括的に分析した。分析の結果、全体として対乳幼児発話は対成人発話とは大きく異なり、育児語やオノマトペの使用および格助詞の省略が多く、発話長が短かった。しかし、細かく分析すると、子の発達に伴う調整が見られ、使用単語や発話長は2-3歳の間に大きく変化し、対成人発話に近づいていた。従って、レジスターのルールの理解を示した20ヶ月児を含む、生後1-2年の間は、比較的安定した言語レジスターの入力を得ていることが示唆された。

第4章では、5歳児、7歳児、成人を対象に言語レジスターが持つ社会的意味の理解の検討を行った。実験では、話し手が聞き手（大人・乳児）に対し、適切なレジスターあるいは不適切なレジスターで話しかける場면을提示し、その際の聞き手の気分の評価を求めることで、不適切な言語レジスターの使用が聞き手に与える印象の理解を検討した。加えて、不適切な言語レジスター使用を、他者の社会的評価に用いるのかも併せて検討した。その結果、5歳児は言語レジスターの適切さ・不適切さが与える聞き手への影響を考慮しなかったが、7歳児と成人は適切な言語レジスターの使用時は聞き手の気分が良いと判断した。さらに成人は、大人に対して不適切なレジスターで話しかけると相手に不快感を与えると判断した。つまり、5歳児は言語レジスターの選択ミスが聞き手に与える印象に理解を示さなかったが、7歳児は不完全ではあるものの、理解を示した。また、不適切な言語レジスターの使用の社会的評価への利用は7歳児と成人でのみ見られ、大人に適切なレジスター（対成人発話）を使用している話者から学習することを選択し、乳児に適切なレジスター（対乳幼児発話）を使用している話者を好む傾向にあった。

第5章では、養育者の格助詞使用に着目した詳細な分析により、使用理由が不明確な対乳幼児発話の発話動機の解明を試みた。その結果、格助詞の省略傾向は養育者の持つ信念と関係しており、子どもには対乳幼児発話を話すべきだと考えている養育者ほど格助詞を省略する傾向にあった。また、格助詞やそれが付与する項の省略されやすさは、子どもの年齢や格の種類、自動詞他動詞の別によって異なり、文理解の可能性を保持した状態で、できる限り情報量を削った結果であることが示唆された。従って、養育者が聞き手である乳幼児の理解力を考えた結果として、対乳幼児発話を用いている可能性が示唆された。

以上の研究を受け、第6章では、言語レジスターの獲得に関して、乳幼児による言語レジスターの理解の発達過程の再整理を行い、その獲得メカニズムおよび今後の展望を議論した。本研究では、(1) 言語能力が未熟な低月齢児によるレジスターへの感受性を明らかにしたことに加え、(2) レジスター運用の社会的意味に焦点を当て、世界に先駆けて実証的なデータを収集した。これにより、レジスターの発達がルールの獲得と運用の社会的意味の獲得の2段階から成ることを、新たに明らかにした。また、(3) 統制された状況下で、多人数の養育者の発話を取得、定量的な分析を行い、言語レジスターの学習源の記述及びレジスターの使用意図の推定を試みたことで、レジスターの獲得メカニズムおよびレジスター使用の実態の解明のための重要なデータを提供した。今後の課題としては、レジスターの獲得メカニズムの解明や他の言語レジスター（例えば、カジュアルな対成人発話、フォーリナートーク）の獲得過程の検討が挙げられる。また、多言語話者において見られる言語の切り替え（コードスイッチング）と言語内でのレジスターの切り替えの類似点と相違点の検討や、言語間、文化間のレジスター発達の比較も重要だろう。また、コミュニケーションに困難を抱える自閉症者など、非定型発達児におけるレジスター発達の解明を行うことで、言語レジスターの使用、さらには他者とのコミュニケーションを不得手とする人への療育・サポートなどにつながることを期待される。

(論文審査の結果の要旨)

他者との円滑なコミュニケーションを実現するためには、自分が置かれた状況に即して、様々にその振る舞いを調整しなければならない。中でも、言語コミュニケーションにおいては、文法に則った言語情報を生成するだけではなく、情報が伝えられる状況に相応した方法での伝達が必要である。このように、相手や状況や話題に応じて変化する言語形式を「言語レジスター」という。本論文は、ヒトが言語レジスターを獲得していく過程とそのメカニズムの解明に迫ることを主眼に置き、発達科学の巧妙な手法を用いて検討した意欲的な論文である。

論文は、6章からなる。第1章では、言語レジスターに関連する先行研究が丁寧かつ精緻にレビューされ、本論文が発達科学においてどのような意味を持つのが明示される。言語レジスターを獲得するための前提条件として、言語レジスターのシグナルとなる音韻・語彙・統語などの言語的特徴、聞き手の地位や話者との関係といった社会的カテゴリーの理解、言語的特徴と社会的状況の適切な組み合わせの理解の必要性が明快に論じられ、検討すべき問題提起がなされる。

第2章では、年少児における言語レジスターのルールについて検討された。従来、適切で一貫した言語レジスターの使用は6歳以降に認められることが報告されてきたが、乳児が発達の比較的早い時期に、対乳幼児発話や対成人発話、非母語、方言などの話し方を区別すること、また、性別や年齢、人種といった社会的カテゴリーを形成していることを考慮すると、3歳未満の幼児においても、言語レジスターを理解している可能性があると考えられる。論者は、言語爆発の最中にある20カ月児を対象に、言語レジスターと聞き手の関係を理解しているどうかを期待違反法によって、また、言語レジスターが話し手ではなく聞き手が誰であるかによって変わることを理解を、馴化スイッチ法という手法で検証した。その結果、20カ月児であっても、言語レジスターと聞き手の関係を部分的ではあるが理解していること、また、聞き手によって言語レジスターが変わることを理解していることが分かった。論者の選択した適切な手法が実を結んだ結果であり、このように幼い年齢の幼児での言語レジスターの理解が示されたことは注目に値することである。

第3章では、言語レジスターの獲得が、養育者の言語入力と幼児の発達におけるダイナミックな相互作用の過程であるとの仮説を立て、1〜3歳の子を持つ養育者60名を対象に、アニメーションの説明を求める構造化された場面で、対乳幼児発話と対成人発話を取得し、精緻な分析を行った。その結果、子の発達に伴う養育者の言語の調整が見られ、2〜3歳の間に大きく変容し、対乳幼児発話から対成人発話へと移行することが分かった。養育者の言語入力と発達の関係に関心を持つ発達研究者は多いが、実際にはそれほどうまくデータを取得できていないのが現状であることを考えると、コンピュータを用いて、アニメーションの説明を求める構造的な場面での発話取得を行ったことは、論者の慧眼を示すものであろう。

言語レジスターは、社会的文脈にも大いに関係する。第4章では、5歳児、7歳児およ

び成人を対象として、言語レジスターが持つ社会的意味の理解を検討した。実験では、聞き手が適切な言語レジスターで話しかけられる場面と不適切な場面で話かけられる場面を呈示し、幼児にその際の聞き手の気分を推測させた。また、言語レジスター使用の適切さによる使用者に対する幼児の選好を調べるとともに、言語レジスターの不適切な使用を使用者の社会的評価に用いるのかも検討した。その結果、5歳児は言語レジスターの適切さが与える聞き手への影響を考慮しなかったが、7歳児と成人は適切な言語レジスターの使用時は聞き手の気分が良いと判断し、使用者の社会的評価に利用することが分かった。さらに成人は、大人に対して不適切な言語レジスターの使用は相手に不快感を与えると判断した。言語レジスターの社会的意味の理解の発達を問う研究は、これまで全く行われておらず、言語レジスター研究の歩を進める研究として位置づけられる。

第5章では、養育者の格助詞使用に着目した詳細な分析により、対乳幼児発話の動機の解明を試みた。その結果、格助詞の省略傾向は養育者の持つ信念と関係しており、子どもには対乳幼児発話を使用すべきだと考えている養育者ほど格助詞を省略する傾向にあることを確かめた。

第6章では、以上の研究をまとめ、言語レジスターの獲得過程とそれを推進するメカニズムについて討論を行い、本研究では、以下を結論とした。(1) 言語能力が未熟である年少児であっても言語レジスターへの感受性が明らかになったこと、(2) 言語レジスター運用の社会的意味に焦点を当て、世界に先駆けて実証的なデータを示し、言語レジスターの発達がルール of 獲得と運用の社会的意味の獲得の2段階から成ることを明らかにしたこと、また、(3) 構造化された状況下で、多人数の養育者の発話を取得、定量的な分析を行い、言語レジスターの学習の源の記述及び言語レジスターの使用意図の推定を試みたことで、言語レジスターの獲得メカニズムおよび言語レジスター使用の実態の解明のための重要なデータを提供したことの3点である。

以上のように、本論文は、従来の報告よりも年少の幼児を対象として、言語レジスターの理解とその学習の源となる養育者の言語入力との関係に迫るデータを提供し、さらには年長幼児が、言語レジスターの使用による社会的意味を理解していることを示したものであり、言語発達という大きな研究領域の未来を拓いたことは疑いない。しいて難点をあげるとすれば、言語レジスターとして使用されているものが、対乳幼児発話と対成人発話に限定されており、他の言語レジスターにおける検討がなされていれば、言語レジスターの発達に関するより詳細な記述が可能になると思われる。これらは今後の課題であり、近い将来、論者によって解決されることであろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2018年6月6日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。